

2020 年度入学生の学修行動比較調査と コンピテンシー・チェック・プログラムの結果 —コロナ禍後の回復と変化—

堀内由樹子・劉婧

お茶の水女子大学・教学 IR・教育開発・学修支援センター

Results of the comparative survey of academic behavior and the competency check program for students enrolled in the 20th academic year: Recovery and change in academic behavior after the COVID-19 pandemic

Yukiko HORIUCHI and Jing LIU

Ochanomizu University; Center for Institutional Research, Educational Development, and Learning Support

The present study focused on the students enrolled in the 20th academic year and aimed to examine the impact of the COVID-19 pandemic on students. We conducted two longitudinal surveys (the academic behavior survey and the competency check program), compared the survey results of 2020, when the COVID-19 crisis began, and 2022, when the situation was almost restored. As a result, the negative impact on academic behavior caused by restrictions on the use of on-campus facilities and interpersonal exchanges was on a recovery trend. In addition, the use of learning through the Internet, which was activated in the early days of the COVID-19 pandemic, continued. The students' literacy ability and emotional control ability were also improved. Based on these results, we considered the negative and positive effects that the COVID-19 crisis had on learning behavior and competencies, and discussed how future learning support should be.

Keywords : longitudinal survey; survey of academic behavior; competency check program; COVID-19; IR

はじめに

2020 年初頭からの COVID-19 のパンデミック発生の影響により、2020 年度～2022 年度までの大学の教学の状況は大きく変動していた時期といえる。本学に限らず全世界的に大学では、対面授業が制限され、図書館などをはじめとする学内施設は閉鎖、入構制限がなされ、授業等はインターネットを通じたオンライン授業が全面的に行われる事態となった。本学においても、対面授業からオンライン授業への全面切り替えが行われ、学修支援システム Moodle を通じた講義の提供やオンライン会議システムを通じて授業が行われた。こうした事態は、COVID-19 の収束状況とあわせて徐々に緩和されてきており、本学でも 22 年度にお

いては多くの授業が対面授業となり、学内の施設利用に関しても現在では制限は解除された状況になっている。このような変動があった時期の開始である 2020 年度に入学し、22 年度で 3 年生となった学生は大学生活をほぼコロナ禍の中で過ごした学年であり、学修行動や環境に大きく影響を受けたといえる。

このようなコロナ禍の影響はどのような形で表れているのだろうか。本学で定期的に 1 年生と 3 年生に対して実施している ALCS¹⁾ 学修行動比較調査²⁾ (以下、学修行動比較調査とする) においては、2020 年度の 1 年生の調査結果は、2016～2019 年度の 1 年生の調査結果と比較すると、その回答傾向に特異な部分があることが指摘されている (半田, 2020)。具体的には、図書館の活用経験や図書館の蔵書内容、サービス、使いやすさ、授業時間外に友だちと授業に関する学修

をすることといった施設利用や対人交流に基づく経験や満足度が例年と比べて否定的な回答になっている一方で、インターネットや学内 LAN を使った授業資料・課題の受けとりや提出、小テストの実施やレポートなどの課題提出といった学修支援システムの活用による学修行動の経験が例年よりも高くなっているといった傾向が見られた。施設利用や対人交流が制限されている一方で、インターネットを通じて課題や小テスト実施等の特定の学修行動は積極的に行われていたことが示されている。これはあくまでも入学当初の状況を反映した結果であり、その後の制限等が緩和されていく中でどのような学生生活を送り、それに対してどのような成長の実感や満足度を得ていったのかについては検討が必要である。実際に 2020 年度入学生が 4 年生となり、就職活動を行う時期を迎えたことにより、学修環境の特異な変化に応じた学生生活を送ったことの影響を検討した調査は既にいくつか行われている。例えば、情学が就職支援サービス「あさがくナビ 2024」を通じて 24 年卒業・修了予定の学生を対象に実施した調査では「現在の学生生活に満足している」との回答が 7 割を超えていることが示されており、学生生活で力を入れていることは「学校の授業」という回答が得られている。課外活動やサークル活動、留学等が制限される中で大学の講義中心の生活を送っていたことが見て取れる結果となっていた（学情，2022）。この調査に限らず、類似した調査は行われているが、基本的には就活前の 1 時点のみの結果であるため、時系列な変化についての検討はできないものとなっている。

そこで本稿では研究の 1 つ目として 2022 年度入学生に 1 年次と 3 年次に実施した学修行動比較調査について縦断的な分析を実施することで、2022 年度入学生が学生生活を通じて得た経験、成長の実感、満足度、希望を検討することとした。検討時には、(1) 半田 (2020) で示された 1 年生時点での結果の特異性が示された部分に焦点を当てて検討すること、(2) コロナ禍の影響を受けていなかった 2019 年度の 3 年生の調査結果と 2020 年度の 3 年生の調査結果の横断的に比較することの 2 つを合わせて実施することで、コロナ禍の影響について詳細な検討を行う。コロナ禍の制限が解除されることに伴い、学内施設利用や対人交流の回復傾向は見込めると予想される。ただ、コロナ禍前の水準まで戻っているのかについては詳しく検討する必要があるといえる。また、大学の正課カリキュラムの授業で育成される部分については、本学ではインターネットを通じた提供はできる環境にあったこと

から、成長の実感や満足度が高い結果が出てくると予想される。インターネット提供になったことで経験の内容も変容している可能性もあるだろう。

次に、研究の 2 つ目として学修行動比較調査と同様に 1 年次と 3 年次で実施していた ALCS コンピテンシー・チェック・プログラム²⁾ (以下、文中では ALCSccp とする) の結果を縦断的に分析することで、様々な特性の成長の実感がどのくらい得られたかについても検討した。コンピテンシーは、従来のテストやその結果からの評価がその後の職務上の業績や人生における成功を予測し得ないことを受けて、社会的業績を予測するような指標を作成したいという動機から発生したものであり、文部科学省が提唱した「生きる力」や経済産業省の「社会人基礎力」等と類似した概念である。従来のテストで測定されてきた知識やスキルにとどまらず、自己概念や特性、動機なども含めた、人間の幅広い能力を測定する概念とされ、認知的能力にとどまらず、情動的、社会的側面を含む非認知能力を含めた概念、などともいわれている (cf. 松下, 2010)。OECD の Education2030 においては、2030 年の未来に求められるコンピテンシーとして「新たな価値を創造する力」、「対立やジレンマに対処する力」、「責任ある行動をとる力」の 3 つが示され、その構成要素として「知識」、「スキル」、「態度及び価値観」が位置付けられており、目指す目標が社会的業績や成果などの「経済的成長」一辺倒の目標から人々が心身ともに幸せな状態を示す「ウェル・ビーイング」に代わり、自分たちが目指す未来を主体的に動いて実現していくために「エージェンシー」と呼ばれる「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する力」を中核的概念と位置づけている (cf. 白井, 2020)。ALCSccp の調査実施主体である教学 IR 比較コモンズのホームページでは、「個別授業を通じて総合的、潜在的に培われる力、課外活動や学外のアルバイト/インターン経験も含めた広範な活動をつうじて身につく力、まさに学生主体の学びによる力こそが広く社会で求められる成果としての力 (教学比較 IR コモンズ, 2021)」としている。以上のようなことから、今回の ALCSccp の調査で扱うコンピテンシーは、大学の正課カリキュラムに依存しない学生自らの動機にしたがって主体的に作り出す学びから伸びる力を含めたものといえる。

このようなコンピテンシーは、様々な活動が制限されたコロナ禍においては、成長や主体的な学びのきっかけとなるような学外の経験機会が失われたことによる成長機会の損失があると予想される一方で、従来の

正課カリキュラムはこれまで同様インターネットを通じて提供されることで大学の講義で成長が促される知識やスキルの側面の成長実感は維持されると予想される。また、従来にないコロナ禍という特殊な環境に対処したり、独自の方法で順応するといった常でない機会に恵まれたことで困難な状況に向かうことで育成される人格特性が伸びてくる可能性は大いにある。ALCScepの結果からどのような特性について成長の実感を学生たちが得たのか確認することで、コロナ禍のマイナス面とプラス面の影響の可能性を検討することとした。

本稿では、これら2つの研究結果から、2020年度生の学修行動へのコロナ禍の影響について考察していくこととした。

研究1 ALCS 学修行動比較調査の縦断的分析

まず、学修行動比較調査の結果について報告する。前述したように、ここでは2022年度3年生のデータを中心に据え、1年次のデータにあたる2020年度1年生のデータとの縦断的分析を実施することでコロナ禍に学生生活を送ったことによる学修行動への影響を検討した。また、併せて多年度との比較結果を参照することで、コロナ禍の影響からの回復や変化の維持の様子も確認した。

方法

調査対象者

本調査の対象者は、お茶の水女子大学に20年度および22年度の調査実施時期に学士課程の1年次と3年次に在籍していた学生全員であった。各年度の対象者数と回収率はTable1に示した。このうち20年度調査と22年度調査の両方で回答が回収できた153名のデータを用いて縦断分析を実施した。また、22年度の3年生データの比較対象として19年度調査の3年生のデータも用いた。19年度の3年生の対象者数と回収率もTable1に併記した。

調査項目

本調査は「ALCS 学修行動比較調査」として2016年度から実施された調査パッケージを用いた。学修行動比較調査の調査実施主体は教学比較IR コモンズ(以下、コモンズと略す)であり、コモンズより提供されたウェブ調査システムを用いて調査を実施していた(システムの詳細は「調査手続き」参照)。設問内容は、経験22項目、時間4項目、成長20項目、満

Table1 2019-20年度 学修行動比較調査の回収数及び回収率

		2019年度 3年生	2020年度 1年生	2022年度 3年生
年度データ	回収数	211	451	367
	回収率	41.8%	97.2%	75.7%
		153		
縦断データ	回収数	—	各年度の回収数中の割合	
	回収率	—	33.9%	41.7%

足18項目、希望16項目の計80項目の自己評価式設問から構成されていた。本調査では、このうち時間4項目を除く結果で分析を行った。回答形式は、経験は「1:まったくなかった」～「6:かなりよくあった」、満足は「1:かなり不満」～「6:十分に満足」、希望は「1:全く望んでいない」～「6:強く望んでいる」のそれぞれ6件法で回答してもらった。また、成長は「1:とても減った」～「7:とても増えた」の7件法であった。

調査手続き

19年度～22年度の本学における調査実施手順は共通の方法を用いた。まず、調査対象者となる各年度の1年生および3年生の学生全員に調査の趣旨や方法を記した調査協力依頼のメールを一斉に配信した。メール上にチェックプログラム調査回答ページに遷移できるURLを掲載した。調査に協力する学生はこのURLから調査画面に入るが、調査システムに入る際には本学の統合認証システムを通じて学生個人の認証IDでログインしてもらい、回答対象学生であるかを確認する方式をとった。

この方式によって実施するため、まず、対象者の学内認証IDに対応する調査回答者IDを実査開始前に作成し、コモンズに提供した。この調査回答者IDは各調査独自のIDであり、年度ごとに作成され、学籍番号や氏名等の情報は一切含まれないランダムな数字の羅列と、学年と所属学部を示すアルファベットからなるものであり、コモンズ側からは回答者の学年および所属学部は分かるが、個人は特定できないように仕組みになっていた。実査の際には、解答する学生に統合認証システムによる認証手続きを学内に設置した装置で行ってもらい、認証通過後は学内のシステムにおいて認証IDを調査回答者IDに変換し、調査回答者IDをコモンズに送信してウェブ調査システムに入れるようにした。

実査期間中はコモンズより提供された回収済みの件数と回収率、未回答の調査回答者 ID 一覧が随時モニターできるウェブページにアクセスし、未回答者に対しては回答催促のメールを送信した。回収状況に応じて、2～3回の催促メールを送信していた。実査期間完了後にコモンズよりローデータ等の提供を受けた。

実査期間

19年度調査は2019年7月8日～7月30日、20年度の調査は2020年7月10日～8月2日、22年度の調査は2022年7月11日～8月2日の期間にそれぞれ実施した。実査期間はだいたい2～3週間であった。

集計と分析方法

本稿では、今回得られた回答データをできるだけ分析に用いるため、回収した回答データのうち1問でも回答があったデータは分析対象として含めた。また、縦断調査データの場合は1年次と3年次の両方で同じ設問に回答していることが必須条件となるため、項目ごとで分析対象人数が変動した。それぞれの分析人数については度数として分析結果を示したTable2～5に示した。経験、満足、希望の各項目は6件法であったため、評定値をそのままスコア値として用い、1～6点で得点化した。そのため、経験、満足、希望の平均得点は3.5点を分岐点として、それより下は否定的、それより上は肯定的な反応とした。また、7件法であった成長については1～7点で得点化し、平均得点が4点より下は否定的、4点より上は肯定的な反応と判断した。本稿の分析は、統計ソフトSPSSver.27を用いて実施した。

結果と考察

お茶の水女子大学2020年度生について、学修行動調査の経験、成長、満足、希望のそれぞれのカテゴリの各設問について、(1)2020年度の1年次と2022年度の3年次の縦断比較分析、(2)2019年度3年生との横断比較分析を実施した。(1)については対応のある t 検定を実施し、1年次からの3年次の得点の変化の方向性を見るとともに、特に半田(2020)で2020年度の1年生において2016～2019年度の1年生と比べて特異性が見られた部分についてどのように変化したのかを確認することで、コロナ禍の影響からの回復や変化を検証することとした。(2)については対応のない t 検定で実施し、コロナ禍前の2019年度の3年生と比較することで、2022年度3年生の値がコロナ禍の

影響からほぼ脱却したといえるのかを確認した。

経験項目の結果

ここでは、経験項目の結果について報告する。経験項目については、「図書館の活用」、「思い通りに学業ができてきている実感」など肯定的な側面を測定する設問群と、「授業に遅刻したこと」などの否定的な側面を測定する設問群があり、経験項目の得点が高いことが逆の方向性を示すものとなっていた。そこで、ここでは前者をポジティブ経験、後者をネガティブ経験として分けて結果を示すこととした。

経験項目の縦断分析結果をポジティブ経験とネガティブ経験それぞれについて1年次より3年次に上がったもの、有意差がなかったもの、1年次より3年次で下がったものの順でTable2に示した。紙面の都合上、経験項目に限らず、本稿の縦断的分析の結果は、有意差があった設問と、2020年度1年生データで特性が示された設問のみ掲載することとした。

結果として、「図書館の活用」、「学内に設けられている自由に学べる場の活用」といった施設利用に関する経験の設問について、1年次は平均評点が否定的であったものが肯定的な得点にまで上がっていた。否定が肯定まで平均評点値が上がったものとしては「授業時間外に友達と授業に関する学修をしたこと」、「課題発表の機会」、「思い通りに学業ができてきている実感」があった。2020年度ではコロナ禍の制限により利用できなかったものが利用できるようになり、施設利用にとどまらず、対人交流や学業活動が思うようにできるようになったことが示された。特に「課題発表の機会」は、19年度3年生と比較すると機会が有意に増えている状況にあった。本学では2020年度よりALH(Active Learning Hour)という学生が主体的に学ぶ機会を正課の授業の中に2コマ分設けることを強く推奨している背景もあり、対面授業の再開に伴い授業内に取り入れやすい課題発表の機会が増大したものと考えられる。

また、2020年度1年生次に他年度よりも低いとされていたポジティブ経験の5項目はすべて1年次より3年次で得点が上がっているが、そのうち、「図書館の活用」、「授業時間外に友達と授業に関する学修をしたこと」、「大学内外での勉強会、研究会、講演会に参加したこと」は19年度の3年生と比べると評点が低い結果となっていた。全体として、20年度1年生で特異性があるとされたもののうち、強くマイナスの影響が出ていた部分についてはコロナ禍以前の水準までには戻るに至っていないことから、現時点では回復

傾向にあるものの、強く影響を受けた部分についてはその影響が残存しているといえた。

逆に2020年度1年次に他年度よりも高いとされていた4項目については、「インターネットや学内LANを使った授業資料・課題の受けとりや提出」、「小テストの実施やレポートなどの課題提出」は19年度3年生よりも評点が高かった。学修支援システム Moodle の利用の向上や課題提出の増大が高レベルのまま維持されていることが示されており、マイナス方向の特異性と同様に強くプラスの影響が出ていた部分についてはコロナ禍後もその影響が残存していた。ただ、「小テストの実施やレポートなどの課題提出」は「提出物に対する教員からの添削やコメント」と同様に2020年度の1年次よりは評点は有意に下がっていた。これは、本学から課題による学生への負担が増していたことから、課題の時期をずらしたり減らす配慮を要請したことが一部影響した可能性がある。結果的にはいづれも肯定的な評点のままで維持されているため、大きな減少はなかったといえる。

ネガティブ経験については、「提出期限までに授業の課題を完成できなかったこと」、「授業に遅刻したこと」で1年次に比べて3年次で評点が上がっていた。前者の課題の未達成については19年度3年生よりも高いことから、前述したように課題を課される機会が増えたことにより、課題の負担が上がったことで完成できないリスクも上がったことが示唆された。また、後者の遅刻については、1年次は全面オンラインであったため、オンライン会議システムにログインするだけで遅刻は免れていたことから、3年次での対面授

業の再開に伴い、遅刻する機会が増えたことを反映した結果といえるが、19年度3年生よりは少ないことから、対面再開で遅刻が例年よりも増えたということ示されていなかった。いずれのネガティブ経験も評定自体は否定的な傾向であったため、大きな問題ではないといえる。「授業内容がつまらなく感じたこと」は、平均評点自体は肯定的な方向にあり、全体としてつまらないと思う機会が多いことが示されているものの、1年次から増えていることはなく、また、1年時時点でも例年よりも低い特異性があるとされていたもので、19年度の3年生と比べても評点は有意に低かった。コロナ禍の影響により、オンライン授業などの新しい要素が加わったことで講師側の創意工夫が求められたことで学生に授業に興味を持ってもらえるような取り組みが生じた可能性はあるだろう。

成長項目の結果

成長項目の結果を Table3 に示した。1年次と3年次で有意差が見られたものについては、成長を実感した肯定的な方向へ結果が変化していた。2020年度1年生の特異性として例年よりも低いとされていた「人間関係を築いたり調整する力」も上がっており、19年度の3年生との間に有意差が見られなかったことから、例年の水準にまで戻っているといえた。対人交流についても制限の緩和とともに戻ってきており、人間関係に関する能力の成長を実感できる機会も増えたと思われる。1年次に例年より高い特異性があるとされていた3項目のうち「表現すべき内容の文章を書く力」は、19年度3年生よりも高い評点を示しており、高維持だっ

Table2 学修行動比較調査：経験項目_1年次と3年次の縦断的分析結果（対応のあるt検定）

設問文	N	1年次		3年次		t 値	p 値	d	回答方向	平均値差	1年次特異性	19-22年度
		M	SD	M	SD							
ポジティブ経験												
図書館の活用	142	1.56	(1.09)	4.37	(1.36)	20.45	<.001	1.72	▲		---	>
学内に設けられている自由に学べる場の活用	134	1.51	(1.06)	4.23	(1.33)	19.31	<.001	1.67	▲			≐
授業時間外に友だちと授業に関する学修をしたこと	148	2.33	(1.54)	3.98	(1.41)	11.76	<.001	0.97	▲		---	>
課題発表の機会	147	3.46	(1.16)	4.46	(0.95)	8.95	<.001	0.74	▲	1年<3年		<
思いどおりに学業ができていく実感	149	3.34	(1.19)	3.98	(1.12)	5.62	<.001	0.46	▲			≐
大学内外で勉強会、研究会、講演会に参加したこと	147	1.84	(1.30)	2.54	(1.30)	5.18	<.001	0.43	N		---	>
よく学ぶ学生に刺激されて学修が促されたこと	145	3.79	(1.41)	4.41	(1.16)	4.78	<.001	0.40	P		--	≐
教職員やアドバイザーに学修に関連したことを尋ねたり相談したこと	145	2.17	(1.33)	2.72	(1.38)	3.61	<.001	0.30	N		--	≐
授業内での学生間のディスカッション	149	4.36	(1.07)	4.30	(1.09)	-0.57	ns	-0.05	P		++	≐
インターネットや学内LANを使った授業資料・課題の受けとりや提出	149	5.68	(0.89)	5.54	(0.78)	-1.46	ns	-0.12	P	ns	+++	<
小テストの実施やレポートなどの課題提出	149	5.53	(0.61)	5.28	(0.76)	-3.34	.001	-0.27	P		+++	<
提出物に対する教員からの添削やコメント	148	3.99	(0.93)	3.56	(1.12)	-3.83	<.001	-0.32	P	1年>3年	++	≐
ネガティブ経験												
提出期限までに授業の課題を完成できなかったこと	149	1.69	(1.08)	2.19	(1.35)	4.28	<.001	0.35	N	1年<3年		<
授業に遅刻したこと	149	1.76	(1.01)	2.13	(1.29)	3.51	<.001	0.29	N		---	>
授業内容がつまらなく感じたこと	149	3.71	(1.04)	3.68	(1.01)	-0.28	ns	-0.02	P	ns	-	>

注) 回答方向: ▲ 平均評点が否定から肯定に変化、▼ 平均評点が肯定から否定に変化、N 平均評点が否定で変化なし、P 平均評点肯定で変化なし
 1年次特異性: 半田(2020)より抜粋。 --- マイナス大、-- マイナス中、- マイナス小、+++ プラス大、++ プラス中、+ プラス小
 19-22年度: > 19年度が22年度よりも経験が多い、≐ 19年度と22年度で有意差なし、< 19年度が22年度よりも経験が少ない

たものがさらに成長を実感するようになっていた。課題等を多く課されたことで、文章を書く機会が例年以上に増え、実際に文章力が向上するとともに、成長を実感できたのではないかとと思われる。また、「情報技術 (ICT) の運用力」については 19 年度 3 年生との有意な違いは見られず、1 年生でのオンライン授業やインターネットを通じた課題提出等の経験から運用力は必要に迫られて強制的に上がらざるを得なかったものの、それ以上の発展性は特になかったものと思われる。「英語以外の外国語の運用力」は 1 年次よりも有意下がっており、2019 年度の 3 年生よりも下がっていた。コロナの影響というよりはこの学年特有の特性だった可能性も考えられ、それが学生生活を経るごとに減少していったと考えられる。同じ語学力の設問である「英語の運用力」も 2019 年度 3 年生との有意差は見られなかったが、平均評点が肯定的だったものが否定的に下がっていた。確かにコロナ禍により直接的な国際的な対人交流は制限されていた影響は一部あると思われるが、3 年生で語学力が下がってしまう傾向は例年結果として指摘されていたことから、コロナ禍に関係なく語学力を上げるための機会を大学としても学生としても設けられていない可能性があるだろう。

満足項目の結果

満足項目については、全体的に 1 年生の時点で元々肯定的な評点がついているものばかりであり、1 年次から 3 年次になったことでの大きな評価の変化は見込

めない結果にはなっていた。ただ、他年度との比較では 1 年次の特異性として、「学内の雰囲気や居心地、環境」、「一般的な教室の設備や使用感」、「実験・実習室や能動的な学修を進めるための設備や機器」、「図書館の蔵書内容、サービス、使いやすさ」、「学費に比した教育内容」は例年よりも低い評点が与えられていることが示されていた。19 年度 3 年生と比べると、「図書館の蔵書内容、サービス、使いやすさ」以外は 19 年度の水準と違いがないままには戻っており、「一般的な教室の設備や使用感」、「実験・実習室や能動的な学修を進めるための設備や機器」については 19 年度よりも満足の評点が有意に高い結果となっていた。特に設備が改善されたり、変わったということはなく、1 年次ではそもそも教室等は利用できていなかったことから、利用できることだけで満足度が上がった可能性がある。

また、「授業の多様性」や「事務スタッフの対応」は例年に比べて評点が高い特異性が指摘されていたが、3 年次では下がっていた。「授業の多様性」については、3 年生となり授業全体の専門性が上がったことで多様性が得られなくなったことが影響していると思われる。また、「事務スタッフの対応」は、コロナ禍での入構制限のためにオンラインだけでの手続きが中心となったことで事務スタッフとインターネットを介してやり取りをする機会が増えたことでこうした肯定的評価につながったものが、そうした機会の減少により例年並みの水準に戻ったと考えられる。

Table3 学修行動比較調査：成長項目_1 年次と 3 年次の縦断的分析結果 (対応のある t 検定)

設問文	N	1年次		3年次		t 値	p 値	d	回答方向	平均値差	1年次特異性	19-22年度
		M	SD	M	SD							
プレゼンテーションを準備し発表する力	148	4.57	(1.01)	5.35	(1.07)	7.51	<.001	0.62	P			≡
学術的な文献の読解力	148	4.78	(0.78)	5.39	(0.89)	7.10	<.001	0.58	P			≡
問題を論理的に考える力	147	4.90	(0.84)	5.51	(0.88)	7.07	<.001	0.58	P			≡
ものごとの本質をみて判断しようとする力	148	4.90	(0.84)	5.52	(0.88)	6.93	<.001	0.57	P			≡
得た知識やスキルを活かして問題を解決する力	148	4.80	(0.89)	5.36	(0.87)	6.74	<.001	0.55	P			≡
ものごとを分析する力	147	4.93	(0.86)	5.47	(0.89)	6.59	<.001	0.54	P			≡
特定の専門分野に関する理解力	147	5.24	(0.91)	5.83	(0.86)	6.20	<.001	0.51	P			≡
人間関係を築いたり調整する力	148	4.16	(1.38)	4.96	(1.45)	5.63	<.001	0.46	P	1年<3年	---	≡
自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力	146	5.05	(0.90)	5.55	(1.02)	5.37	<.001	0.44	P			≡
リーダーシップ	148	4.05	(0.95)	4.61	(1.16)	5.29	<.001	0.43	P			≡
肯定的な意味で批判的に考える力	147	4.96	(0.91)	5.44	(0.97)	5.13	<.001	0.42	P			≡
明快かつ簡潔に話す力	147	4.45	(0.95)	4.93	(1.13)	5.07	<.001	0.42	P			≡
教養	148	5.25	(0.81)	5.50	(0.94)	3.08	0.00	0.25	P			≡
地域社会が抱える問題への関心や理解力	147	4.88	(1.00)	5.12	(1.01)	2.68	0.01	0.22	P			≡
表現すべき内容の文章を書く力	148	4.95	(1.01)	5.20	(1.05)	2.22	0.03	0.18	P		++	<
情報技術 (ICT) の運用力	148	5.34	(0.98)	5.30	(1.04)	-0.35	ns	-0.03	P	ns	+	≡
英語の運用力	148	4.14	(1.21)	3.85	(1.58)	-2.35	0.02	-0.19	▼	1年>3年		≡
英語以外の外国語の運用力	148	5.39	(0.91)	4.55	(1.19)	-7.55	<.001	-0.62	P		+	>

注) 回答方向: ▲ 平均評点が否定から肯定に変化、▼ 平均評点が肯定から否定に変化、N 平均評点が否定で変化なし、P 平均評点肯定で変化なし
 1年次特異性: 半田(2020)より抜粋。 --- マイナス大、-- マイナス中、- マイナス小、+++ プラス大、++ プラス中、+ プラス小
 19-22年度: > 19年度が22年度よりも経験が多い、≡ 19年度と22年度で有意差なし、< 19年度が22年度よりも経験が少ない

希望項目の結果

希望については、「よりよい学修計画を立てる」、「企業、機関など大学外で体験実習、インターンなどをおこなう」、「幅広い知識、教養を身につけ視野を広げる」、「文章の作成能力が高まるような授業を受ける」の4項目が1年次では例年よりも高い評点がついているという特異性が指摘されていた。1年次は、コロナ禍で様々な物事が制限され始め、不安を感じていた時期に回答していたため、よりよい学生生活が送れるための希望が高まっていた可能性はある。その1年次に比べると、有意な違いがあった項目はすべて3年次で下がっている結果になっていた。また、19年度3年生と比べると、有意な違いはないものが多く、「よりよい学修計画を立てる」と「起業やその意識形成にかかわる学びをする」では22年度の3年生の方が有意に高かった。「起業やその意識形成にかかわる学び

をする」希望は例年では本学では低い評点がつきやすい希望項目であり、22年度3年生でも1年生と比べると肯定的評点から否定的評点に落ちてしまっているため、決して良い結果とはいえない。「よりよい学修計画を立てる」は1年次と同様に他の年よりも高いのは、1年次、2年次と大学の授業に中心的に向き合う大学生活を送っていたことで、大学での学びに対する希望がある程度維持されてきた結果ではないかとも思われる。

研究2 ALCS コンピテンシー・チェック・プログラムの縦断的分析

ここでは、研究1の学修行動比較調査の縦断分析に引き続き、ALCSccpの調査結果について20年度生の1年次から3年次の変化を検討し、コロナ禍によるコ

Table4 学修行動比較調査：満足項目_1年次と3年次の縦断的分析結果(対応のあるt検定)

設問文	N	1年次		3年次		t値	p値	d	回答方向	平均値差	1年次特異性	19-22年度
		M	SD	M	SD							
学内に設けられている自主的に学べる場の雰囲気や使いやすさ	98	3.82	(1.20)	4.65	(1.06)	6.20	<.001	0.63	P			≒
学内の雰囲気や居心地、環境	107	4.34	(1.16)	5.02	(0.84)	5.69	<.001	0.55	P		---	≒
一般的な教室の設備や使用感	95	3.69	(1.06)	4.31	(1.15)	4.90	<.001	0.50	P		--	<
実験・実習室や能動的な学修を進めるための設備や機器	102	3.68	(1.13)	4.29	(1.04)	4.99	<.001	0.49	P		--	<
総合的にみた大学での学び	147	4.25	(1.23)	4.78	(0.82)	5.26	<.001	0.43	P			≒
図書館の蔵書内容、サービス、使いやすさ	104	3.95	(1.19)	4.42	(1.15)	3.56	<.001	0.35	P	1年<3年	---	>
学費に比した教育内容	145	4.19	(1.30)	4.68	(0.81)	4.15	<.001	0.34	P		---	≒
カリキュラムの表現やシラバス記述のわかりやすさ	149	3.85	(1.10)	4.21	(0.95)	3.62	<.001	0.30	P			<
大半の授業の質	150	4.57	(1.03)	4.87	(0.70)	3.55	<.001	0.29	P			≒
学んだ成果に対する評価のされ方	142	4.21	(0.97)	4.49	(0.80)	3.16	0.00	0.27	P			>
授業や学習を支援する電子ネットワークシステム	143	4.24	(1.17)	4.55	(0.81)	2.93	0.00	0.24	P			<
教員の対応	145	4.81	(0.89)	4.89	(0.70)	1.06	ns	0.09	P		+	≒
大半の授業に関して、その履修人数	147	4.88	(0.85)	4.95	(0.74)	0.93	ns	0.08	P	ns	+	≒
奨学金など経済援助の制度と内容	130	4.35	(1.11)	4.25	(0.95)	-0.96	ns	-0.08	P		+	≒
教育内容と将来の進路との関連性	148	4.42	(1.04)	4.24	(1.05)	-2.09	.038	-0.17	P			≒
授業の多様性	148	4.72	(0.87)	4.48	(1.03)	-2.47	.015	-0.20	P	1年>3年	+	≒
事務スタッフの対応	128	4.55	(1.02)	4.19	(1.20)	-3.44	<.001	-0.30	P		++	≒

注)回答方向:▲平均評点が否定から肯定に変化、▼平均評点が肯定から否定に変化、N平均評点が否定で変化なし、P平均評点肯定で変化なし
1年次特異性:半田(2020)より抜粋。--- マイナス大、-- マイナス中、- マイナス小、+++ プラス大、++ プラス中、+ プラス小
19-22年度: > 19年度が22年度よりも経験が多い、≒ 19年度と22年度で有意差なし、< 19年度が22年度よりも経験が少ない

Table5 学修行動比較調査：希望項目_1年次と3年次の縦断的分析結果(対応のあるt検定)

設問文	N	1年次		3年次		t値	p値	d	回答方向	平均値差	1年次特異性	19-22年度
		M	SD	M	SD							
チームなどで取り組むプロジェクト遂行型の学びをする	150	4.21	(1.18)	4.01	(1.16)	-2.11	.036	-0.17	P			≒
資格を取得するための勉強をする	150	4.89	(1.09)	4.67	(1.15)	-2.15	.033	-0.18	P			≒
短期の留学や海外語学研修に参加する	150	3.87	(1.58)	3.55	(1.60)	-2.62	.010	-0.21	P			≒
専門分野の内容を十分に学ぶ	150	5.39	(0.78)	5.17	(0.84)	-2.63	.009	-0.21	P			≒
よりよい学修計画を立てる	150	4.84	(0.84)	4.61	(0.94)	-2.73	.007	-0.22	P		+	<
企業、機関など大学外で体験実習、インターンなどをおこなう	150	4.96	(1.00)	4.63	(1.26)	-2.74	.007	-0.22	P		+	≒
起業やその意識形成にかかわる学びをする	150	3.51	(1.25)	3.21	(1.33)	-2.81	.006	-0.23	▼			<
討論やプレゼンの訓練になり課題解決をしていくような授業を受ける	150	4.53	(1.02)	4.20	(1.07)	-3.88	<.001	-0.32	P			≒
幅広い知識、教養を身につけ視野を広げる	150	5.43	(0.74)	5.15	(0.84)	-3.99	<.001	-0.33	P		+	≒
文章の作成能力が高まるような授業を受ける	150	4.93	(0.85)	4.56	(1.04)	-4.05	<.001	-0.33	P		+	≒
外国語の運用能力を高めることを目的にした授業を受ける	150	4.67	(1.14)	4.24	(1.19)	-4.34	<.001	-0.35	P			≒
なんらかのボランティア活動に従事する	150	4.49	(1.21)	3.89	(1.23)	-6.17	<.001	-0.50	P			≒

注)回答方向:▲平均評点が否定から肯定に変化、▼平均評点が肯定から否定に変化、N平均評点が否定で変化なし、P平均評点肯定で変化なし
1年次特異性:半田(2020)より抜粋。--- マイナス大、-- マイナス中、- マイナス小、+++ プラス大、++ プラス中、+ プラス小
19-22年度: > 19年度が22年度よりも経験が多い、≒ 19年度と22年度で有意差なし、< 19年度が22年度よりも経験が少ない

ンピテンシー発達への影響を確認する。ALCScpp は 2020 年度からの実施であるため、コロナ禍前にあたる 2019 年度以前のデータは存在しないため、2020 年度と 2022 年度の 2 時点の縦断的分析の結果のみ報告する。

方法

調査対象者

本調査の対象者は、研究 1 と同様にお茶の水女子大学に 20 年度および 22 年度の調査実施時期に学士課程の 1 年と 3 年に在籍していた学生全員であった。本調査の回収率は 20 年度 1 年生が 98.9% で 461 名、22 年度 3 年生が 61.7% で 300 名であった。このうち、20 年度と 22 年度の調査両方に回答していた 278 名のデータを用いて分析を実施した。

調査項目

本調査は、調査実施主体であるコモンズによる「ALCScpp コンピテンシー・チェック・プログラム」による調査であり、各年度ともに様々なコンピテンシーの行動特性を示す 150 項目について尋ねた。回答形式は、設問に対して -50 から 50 の間の 101 段階の数値で答える事実上の連続量アナログ自由尺度であり、自己評価式の設問であった。本調査はウェブ調査であり、調査実施システムは、項目の提示順序効果を低減するために項目提示順序のランダム化や正負逆転項目の出現率の制御（平均 15 設問ごとに 1 回）といった工夫がなされたコモンズ独自のシステムであった。なお、150 項目の内容はコモンズにおいて年度によって部分的に改訂が行われており、20 年度と 22 年度で内容が異なる項目が 7 項目あったため、本稿ではそれらの項目を除いた 143 項目の結果について分析した。

調査手続き

20 年度および 22 年度の本学における ALCScpp の調査実施手順は学修行動比較調査と共通の方法を用いた（詳細は本稿の研究 1 の調査手続きを参照）。

実査期間

20 年度の調査は 2020 年 4 月 11 日～5 月 2 日、22 年度の調査は 2022 年 4 月 19 日～5 月 12 日の期間にそれぞれ実施した。2 つの年度で調査時期はそれほど大きく違いはなく、実査期間も 22 日、24 日とほぼ 3 週間弱であった。しかし、20 年度は前年度の 3 月より新型コロナウイルスの感染拡大が始まった時期であっ

たため、新学期開始が 5 月 7 日と例年よりも遅かった 20 年度は学期開始前に実施した一方で、例年通り 4 月 18 日からの学期開始であった 22 年度は学期開始直後に実施することとなった。

集計と分析方法

本稿では、研究 1 と同様に回収した回答データのうち 1 問でも回答があったデータは分析対象として含めた。また、項目それぞれの分析人数については度数として Table6 に示した。各設問の得点は、前述した 101 段階の回答値、-50～50 の値をそのまま得点として用いた。逆転項目 8 項目については得点の正負の符号を逆転した数値に変換して得点化した。逆転項目の詳細は Table6 に示した。本稿の分析は、統計ソフト SPSSver.27 を用いて実施した。

結果と考察

今回の ALCScpp の調査回答は、あくまでも学生自身の自己評価に基づくものである。そのため、実際に能力や特性が伸びているといえるのかは保証されているとは言えない。そのため、ここで報告する得点の上昇、下降の結果はあくまでも学生たちがそれぞれの能力や特性について成長を実感できたかどうかの指標であることに留意されたい。

20 年度入学生で 3 年次にも ALCScpp に参加した学生のデータを用い、1 年次と 3 年次の設問ごとの平均値の差異を対応のある t 検定により分析した。各設問のうち t 検定で統計的に有意な結果が見られたものについて、度数、1 年次と 3 年次の得点の平均値、標準偏差、 t 検定の分析結果等を Table6 に示した。1 年次よりも 3 年次で平均値が上がっているものとしては、情報の収集・処理・発信や、客観的な状況把握、新しい価値観や独自の視点の提起などが上がっていた。特に「ものごとを客観的に把握する」、「情報処理でコンピューターを駆使して作業する」、「情報発信で電子ネットワークを活用する」、「独力でものごとを進める」、「必要な情報の的確な収集作業」は、ALCScpp においては「客観性、理知、情報、論理」といった特性を示すカテゴリに分類されるものであった。大学の講義内等で学んだ科学的な方法論等に基づいて判断したり、新しい視点を創造することができるようになってきたことを実感していると考えられる。また、「感情はいつも冷静」や「気分のゆらぎをコントロールする」などの自己の感情制御に関しても自信を持てるようになってきていることが示唆されてい

た。逆に、3年次で得点が下がっていたものとしては、様々な物事への関心、社会的な変革を望む傾向等が下がっており、全体的に世界を広げるための好奇心や、社会的な挑戦に対する思いが減少していることが示された。また、「今の自分は多忙すぎる」という実感が3年次の方が高く、「締め切り前にゆとりをもって仕事を終える」や「締め切り期限までに課題を完了する」といったことが下がっていた。

この縦断データの対象者は、前述したように1年次の際には大学生活が始まる前に実施しており、3年次は3年生の新学期開始直後に回答していた。よって、本調査の結果は1年次、2年次を通じた大学生生活によって成長の実感や自信を持つに至ったかどうかを検討できるデータになっており、コロナ禍の影響があった時期の大学生活の影響を反映したものである。全体的な結果としてやや大学の講義等で成長を実感しやすいものの評点が高くなる傾向があり、その一方で大学外の世界に目を向ける傾向が低下していた。コロナ感染拡大の時期においては、課外活動やサークル活動、アルバイト、各種イベント等は自粛される傾向にあり、こうした状況が学生の大学外の社会への関心や興味を下げてしまった可能性がある。本学においても、課外活動やサークル活動の自粛のみならず、図書館をはじめとする各種学修支援施設も一時期閉鎖されることとなり、講義についても対面授業の全面再開は22年度になってからであった。先述した学修行動比較調査においても、図書館や学内外の勉強会等の参加経験が下がっており、22年度の3年次の調査時点でもコロナ禍前の水準までには戻っていないという結果が示されていた。その一方で、一人で過ごす時間や、課題を多くこなす機会は多くあったことも示されており、大学の講義によって独力で潜在的に伸びてくる能力は増大したと考えられる。また、課題の増大が「今の自分は多忙すぎる」という実感や「締め切り期限までに課題を完了する」といったことを達成する困難さを生じさせていたことも今回の結果から示唆された。

また、コロナ禍で様々な物事が制限されている中で精神的に我慢を強いられる機会が増大したことで、自己の感情と向き合う機会も多く、それにより「感情はいつも冷静」や「気分のゆらぎをコントロールする」などの自己制御の成長を実感できた可能性がある。

予想したように、コロナ禍の学修環境の制限は対人交流経験を通して育成される能力や外界との接触で興味や関心が刺激される経験を低下させていたと思われる。その一方で、大学の正課のカリキュラムによって

育成されるリテラシーを中心として能力は成長の実感があつたと思われる。また、コロナ禍という特異な環境で様々な問題やストレスにさらされることで、自己制御能力の育成も進んだ可能性があり、これはコロナ禍という常でない非常事態の中で伸張したコンピテンシーではないかと思われる。

総合考察

本稿の研究1及び研究2から示された結果を改めてまとめる。まず、学修行動比較調査の経験項目については、コロナ禍で制限されていた学内の施設利用や対人交流経験は、コロナ禍前の水準までではないものの3年次で回復傾向にあつた。また、学修支援システムでの課題提出などのインターネットを活用した学修の経験は1年次より下がるものあつたが、コロナ禍前よりは高くなっており、インターネットを活用した学修が活性化し、現在も維持されていることが示唆された。

次に、学修行動比較調査の成長項目およびALCScppの結果から、文章を書く力、情報収集力、客観的な把握力など、大学の授業やその課題作成経験から伸張しやすいと思われるリテラシーを中心とした能力について学生たちは成長を実感していることが示された。また、ALCScppでは感情制御に関する特性が3年次までの間で評点が上がっており、学修行動比較調査では人間関係構築・調整力が1年次では例年よりは低かったものの3年次で評点がコロナ禍前の水準まで上がっていた。入学時に直接的な対人交流が制限されたことによる学生同士の友人関係を築く経験の不足や、様々なものが制限されている中で何とか大学生活を送る際に忍耐を強いられたことがこうした能力や特性の成長の実感に影響したと考えられる。

学修行動比較調査の満足度については、それまで制限されてきた学内施設が利用できるようになったことが大きく影響したせいか、施設関連の満足度が例年よりも高く出やすい傾向にあつた。また、希望については、1年次よりは3年次で全体的に評点が下がっていたものの、よりよい学修計画を立てるといった大学生活中でも学修に注力する希望を例年よりも持っている傾向が示された。

全体的に今回の調査結果からだけを見ると、コロナ禍の影響からは回復傾向にあるが、インターネットを通じた学修活動の活性化、学修活動を中心とした大学生活とそれに関連したリテラシーを中心とした能力の

Table6 ALCScpp_1 年次と 3 年次の縦断的分析結果 (対応のある t 検定)

設問文	N	1年次		3年次		t 値	p 値	d	1年次と3年次 比較結果
		M	SD	M	SD				
社会や組織に新しい価値を加える	273	-3.23	19.58	7.32	25.23	6.56	<.001	0.40	+
情報処理でコンピュータを駆使して作業をする	274	-13.53	25.05	-3.68	26.06	5.83	<.001	0.35	
相手の行動を変える	273	-5.70	20.91	1.47	20.83	4.64	<.001	0.28	
他者の真意を察する	274	10.77	23.76	17.45	24.57	4.36	<.001	0.26	
感性的に評価する	273	11.02	20.48	17.00	21.00	4.26	<.001	0.26	
知識に対する真偽の判断は自分がする	274	6.40	23.22	11.11	22.35	3.02	.003	0.18	+
人間は基本的に善良だ	274	3.58	27.15	8.06	26.23	2.94	.004	0.18	
感情はいつも冷静	273	-4.89	24.26	-0.74	27.58	2.84	.005	0.17	
独力でものごとを進める	275	11.63	22.27	15.80	21.01	2.80	.006	0.17	
必要な情報の確実な収集作業	275	8.55	20.62	12.18	20.96	2.68	.008	0.16	
ものごとを客観的に把握する	274	9.99	19.75	13.18	19.13	2.54	.012	0.15	
先に行く人のあとに従って進む	274	17.67	20.92	20.80	20.00	2.52	.012	0.15	
情報発信で電子ネットワークを活用する	273	-1.68	26.32	2.50	26.26	2.32	.021	0.14	
初対面の人と関わる	274	-0.50	28.87	2.75	29.11	2.16	.032	0.13	
独自の視点やアイデアを提起する	274	0.57	23.35	3.52	24.59	2.15	.032	0.13	
気分のゆらぎをコントロールする	273	-2.82	25.99	0.44	27.48	2.06	.041	0.12	
課題解決にあたり当事者意識をもつ	274	11.84	19.64	8.91	22.77	-2.06	.041	-0.12	
人間関係の幅を広げる	274	-1.50	26.38	-4.91	28.19	-2.10	.036	-0.13	
奉仕の精神が求められる仕事	273	13.75	26.58	10.77	28.03	-2.11	.036	-0.13	
未経験なことに挑戦する気持ち	274	14.56	23.36	11.38	24.29	-2.11	.036	-0.13	
ハイリスク・ハイリターンの仕事	274	-13.47	22.92	-16.32	22.43	-2.18	.030	-0.13	
他人に協力を求める	275	2.61	25.69	-1.23	27.84	-2.40	.017	-0.14	
不正には勇気をもって立ち向かえる	276	8.08	21.58	4.89	21.48	-2.43	.016	-0.15	
多くの人と一緒に仕事をする	275	3.10	24.54	-0.76	25.96	-2.44	.015	-0.15	
自分がどのようになりたいかを知っている	276	3.10	28.10	-1.53	27.21	-2.60	.010	-0.16	
常識に反した考えをもつことへの関心	275	9.29	25.62	4.45	27.50	-2.73	.007	-0.16	
自然や環境への関心	274	16.33	22.76	12.16	24.63	-2.85	.005	-0.17	
チームワーク	275	12.27	23.90	8.21	24.59	-2.98	.003	-0.18	
あいまいな状況にいる	274	-10.41	23.92	-15.71	22.94	-3.05	.003	-0.18	
自分の権利を考え、適切に使うことへの関心	274	17.27	19.26	12.62	22.54	-3.07	.002	-0.19	
挫折してもめげず、簡単にはあきらめない	273	11.94	24.21	7.51	25.02	-3.15	.002	-0.19	
知識を広げるより深める	275	10.72	19.35	6.22	21.15	-3.19	.002	-0.19	
締切前にゆとりをもって仕事を終える	274	1.86	29.58	-3.56	31.73	-3.28	.001	-0.20	
いつもとてもやる気がある	274	-2.28	24.31	-7.54	23.26	-3.36	.001	-0.20	
締め切り期限までに課題を完了する	275	29.15	23.53	23.50	29.42	-3.60	<.001	-0.22	
社会を変えたいという思い	276	7.84	25.11	2.53	26.18	-3.71	<.001	-0.22	
経済や産業への関心	274	3.71	24.72	-2.35	24.86	-3.71	<.001	-0.22	
学問への関心	273	27.07	18.11	20.74	22.29	-4.27	<.001	-0.26	
自分の益よりも属する組織の益を優先する	275	5.34	20.63	-1.22	23.66	-4.61	<.001	-0.28	
変革を進める活動への関心	275	9.24	23.49	2.16	24.89	-4.64	<.001	-0.28	
このような設問に丁寧に回答していく	274	10.15	26.94	0.59	28.24	-5.55	<.001	-0.34	
社会や政治への関心	275	11.83	24.76	2.56	25.97	-5.98	<.001	-0.36	
いまの自分は多忙すぎる	* 273	32.16	19.79	-2.87	24.78	-19.78	<.001	-1.20	

注) *:逆転項目であり、ここで示す得点の平均値は逆転後の結果である。+:平均値は3年生の方が有意に高い場合。濃い色は効果量が0.2以上。
 -:平均値は3年生の方が有意に低い場合。濃い色は効果量が0.2以上。

成長の実感、自己制御能力の慎重といった特徴がみられるといえる。しかし、このような結果の解釈にあたっては、今回の調査対象者はあくまでも 1 年次と 3 年次の調査の両方の回答に協力した学生であり、全学生の一部でしかないため、コロナ禍の時期を含む大学生活により適応してきた層に回答者が偏っている可能性があることに留意する必要がある。したがって、制限が解除されたことによる様々な学修経験の上昇は事実ではあると思われるが、各種特性の成長の実感や満足度、

希望は、コロナ禍に適応できた学生の特性や成長を示唆した結果と割り引いて考える必要があるだろう。

これらの結果を受けて考察すると、本学ではコロナ禍による影響があった中でも学修支援システムやオンライン会議システムのインターネットの学修支援ツールの活用もあって正課のカリキュラム内の授業の提供はある程度できていたと考えることができる。半田(2020)においても 2020 年度の学修行動比較調査の各種分析結果からこうしたインターネットを活用した

学修は学生にも教員にも概ね好意的にとられ、以前の対面授業のみの形式よりも良いという評価があることを指摘している。全面的に対面授業への切り替えが行われた2022年度においてもこうした学修支援システムを活用した学修行動が大きく減少せずに残っていることから、今後もこうしたインターネットを活用した学修は継続していくものと思われる。様々なマイナス要素をもたらしたコロナ禍ではあったが、こうしたツールの有用性を学生や教員が認知し、学修の創意工夫や改善につながったことは副次的ではあるがコロナ禍がもたらしたプラス要素といえるだろう。

その一方で、正課以外の課外活動等の学修や、校内施設利用、対人交流ができなかった点は明らかにマイナス要素となっていたことが今回の結果からも示されている。前述したように、今回の調査回答者は現時点で大学に適応できている学生に偏っている可能性があるが、それにもかかわらず大きくマイナス方向の影響を受けた図書館利用や学生同士の学修行動経験はコロナ禍前までの水準には戻っていないなど、コロナ禍の影響が残存していることは特筆すべきことであるといえる。また、コンピテンシーの特性としては、感情制御能力について学生の間でも成長が実感されていたことは、望ましい結果ではあると同時に、コロナ禍での苦しい状況の中で学生に精神的な負担をかけざるを得なかったことの表れでもある。本学がコロナ禍にあった大きな問題なく教育活動を進められたのはこうした学生自身の貢献もあったことを認識しておくべきである。今後、本学の教学としては今回を契機に活性化したインターネットを活用した授業のメリットを最大限活用するための方策を練ることや、正課のカリキュラム以外の学修の機会をコロナ禍の水準、またはそれ以上にしていくためにはどうしたよいか考えていく必要があるだろう。

注

- 1) ALCSはAcademic Learning and Cultivation Surveyの頭字語で同調査を簡略的に呼称するために用いられている。
- 2) 本調査のALCS学修行動比較調査およびALCSコンピテンシー・チェック・プログラムの調査実施主体は教学比較IRコモンズである。本学はこの2つの調査の参加校の1つとなっており、例年1年次と3年次に実施している。

謝辞

本調査を実施、分析するにあたり、教学比較IRコモンズの東京一様、東京家政学院大学の半田智久先生

にご協力いただきました。ここに感謝いたします。

引用文献

- 学情 (2022) 「あさがくナビ 2024 登録会員対象 2024 年卒業学生の就職意識調査 (学生生活の満足度) 2022 年 11 月版」 <<https://ferret-one.akamaized.net/files/636df1fc68fd75501f47b06a/221115-navienq.pdf?utime=1668149756>> (検索日 2023 年 3 月 13 日)。
- 半田智久 (2020) 「2020 年度のお茶の水女子大学におけるほぼ全面オンライン授業実施による学修行動の変化は、学修行動比較調査の結果にどのようにあらわれたか」 高等教育と学修支援, 11, 75-90.
- 教学比較 IR コモンズ (2021) 「ALCSccp コンピテンシー・チェック・プログラム」 <<https://cmpir.jp/site/ccp1.php>> (検索日 2023 年 3 月 13 日)。
- 松下佳代 (2010) 「<新しい能力>は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー—」 ミネルヴァ書房。
- 白井俊 (2020) 「OECD Education2030 プロジェクトが描く未来の教育—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—」 ミネルヴァ書房。

2023 年 3 月 14 日 受稿

